

ピグマリオンあらずじ

時は 1912 年。

「ぐちゃぐちゃのキャベツの葉っぱ」の様な身なりのイライザ・ドゥーリトルは貧しい花売り娘だ。ある晩コベントガーデンの側で花を売っていると、突然の大雨になり、タクシーを探し回る行人の一人フレディという若者が大事な花駕籠に躓いたので、イライザは下町なまりで激しく罵る。

この、やりとりを一部始終聞きながら、自分の手帳に何やら書きとめている学者風の紳士がいる。彼は訛りの研究者として著名な言語学者、ヘンリーヒギンズ教授だ。ここで教授は偶然にもインド語の言語学者で旧友のピッカリング大佐に遭遇する。二人はまずどこかで語り合おうとしている矢先、教授はイライザのひどい喋り方に辟易し、シェイクスピアやミルトン、聖書の言葉がこの様に粗野に話されてはならぬ、と花売り娘をきめつける。

翌日、洗練された美しい言葉が話せる様にレッスンを受けたいとヒギンズ邸にイライザが訪れてくる。ちゃんとした教育を受けた人の英語が喋れば、きちんとした花やで働けるだろう、というのが彼女の算段なのだ。

一方、教授の客となった大佐はヒギンズに賭けをもちかけ、六ヶ月の特訓でイライザを完璧な英語を話す、プリンセスに仕立て上げることが出来るか、ともちかける。これに教授は即刻応じる。賭けに勝つには、この薄汚れた、無教育で、不作法者の小娘を言葉の完璧さのみでなく、それに相応しいエレガントな身のこなして、素敵な衣装を着こなす、洗練されたレディに仕立て上げなければならない。

家政婦のピアス夫人はイライザのボロ服を焼き捨て、彼女をゴシゴシと洗いあげる。素敵な衣装が注文され、イライザはヒギンズ邸に留まることになる。

レッスンが始まり、イライザは真剣に取り組むが、教授は親切な教師どころか、癩癩もちの威張りやで、彼女が間違う度に怒鳴り、あたりちらす。そこへ、イライザの父親で屑拾いのアルフレッド・ドゥーリトルが金をせびりに乗り込んでくる。娘が豪邸に二人の金持ちの紳士と住むのなら、金を出すのが当然の成りゆきだと胸算用してきたのだ。ヒギンズは屑拾いの筋の立った喋り方に感心し、魅力さえ感じ、10ポンド出そうとするが、ドゥーリトルは5ポンドが妥当だとして、毅然として譲らず、二人の紳士は屑拾いの気骨に半ば圧倒されてしまう。

数週間の集中レッスンが済んだところで、教育の成果を試そうと、教授は裕福な母親のところにイライザを連れていくが、彼女の涙ぐましい努力にもかかわらず、言葉もマナーも完璧とは程とおく、居合わせたひとたちが赤面する悪態まで、出てしまうという体たらく。しかし客の一人、フレディという若者は彼女の話し方に新鮮な魅力を感じ、イライザに夢中になってしまう。(若者の母親はイライザをどこかで見た気がするのだが思い出せない。)

アメと鞭の6ヶ月の特訓レッスンの甲斐あって、花売り娘の酷い訛りは完璧に矯正され、彼女は上流階級の美しい英語を操るエレガントなプリンセスにと変身した。華麗な舞踏会にデビューしたエライザは魅力的なプリンセスとして居並ぶ人々の注目の的となる。遂にヒギンズ教授は賭に勝ったのだ。然しイライザにとってはこの変身は単なる賭ではなかった。今や花売り娘の世界には戻れず、プリンセスとして自分が属する世界もない。教授が単なる賭として、言葉の実験に使われたのかと思うと無性に腹が立ち、ヒギンズに怒りをぶちまけ、その晩ヒギンズの邸宅を出る。外には毎日イライザにラブレターを送り続けているフレディが居る。

彼女は若者にキスを許し、二人は夜のロンドンをタクシーでのりまわす。

翌日、イライザはヒギンズ夫人の許に身をよせる。そこへ興奮したヒギンズと大佐が飛びこんでくる。八方探し回ったあげく、夫人の許に居たイライザに驚き、教授はヒギンズ邸に帰る様にと命令する。夫人は息子に、イライザに対する思いやりの無さを叱りつける。そこへ屑拾いのドゥーリトルがエライザを探しに訪れる。実はヒギンズが、屑拾いのあるアメリカの慈善事業かに事業のスピーチをする様に推薦しておいたのだ。然しこの慈善事業かが、突然死に、思いがけない多額の遺産が屑拾いにころがりこんできたというのだ。ドゥーリトルにしても、突然の運によるこんでいいのか、当惑している。というのは今までの気楽で、気ままな暮らしは許されず、同棲している女性と教会で正式な結婚式をあげなければいけない、というのだ。ドゥーリトルはその午後の教会での結婚式にイライザに出席してもらおうとやってきたのだ。彼女としては、それはかまいわが、その後の自分の身の処し方を決めかねている……。

ヒギンズと二人だけになったイライザ。彼女はじっくりと思いをめぐらし、ヒギンズに愛着を感じ始めていることに気づくが、ヒギンズの下で威張り散らされる生活はゴメンダと宣言。ヒギンズも激しく応酬し、彼はどんな人にも同じ態度で臨んでいるのだ、ヒギンズ無しでは、やがては、最低のどん底生活にもどるしかない、と。彼女がフレディのひたむきな想いを言いかけると、ヒギンズは「郵便配達」にもなれない、無能な男とこきおろす。負けていないイライザは、学んだ英語を武器に社会で独立して生きるとやりかえす。イライザが達した境地にヒギンズは目をみはり、以前にも増して彼女が好ましく思われるが、今ではイライザの方が選ぶ立場になり、ヒギンズを一人残し、堂々と立ち去る。